

# 金沢文庫本『正法眼藏』の訳注研究（七）

外国語禪籍研究班

小川 隆 池上 光洋  
林 鳴 宇 小早川 浩大

## 目次

### 凡例

(八二)	百丈野鴨有省
(八四)	雲巖置也置也
(八六)	禾山習學絕學
(八八)	帰宗豎起拳頭
(九〇)	馬祖六耳同謀
(八三)	庵主溪深柄長
(八五)	雲際如來藏裏
(八七)	金峰喫餅一半
(八九)	清豁賊是家親
(182)	
(184)	
(186)	
(188)	
(190)	

## 凡例

一、本稿は金沢文庫本『正法眼藏中』八二〇則の原文・訓読・現代語訳・出典・注釈である。真字『正法眼藏』（『正法眼藏三百則』または単に『三百則』とも呼称）には、他に真法寺旧蔵本（黄泉本または伊勢氏旧蔵本とも、現在河村孝道氏所蔵）・永昌院本・成高寺本・松源院本・大安寺本（下巻のみの端本）・拈評三百則本・丈六寺本（上巻のみの端本／拈評本の稿本）の七種の異本が現存するが、本稿は和語化への生々しい痕跡を有する金沢文庫本の忠実な訓読と現代語訳を目的とするため、細かな異本校合は行わなかつた。

一、底本には『永平正法眼藏蒐書大成』（大修館書店一九七八年）所収の金沢文庫本を用いた。金沢文庫本は、句読訓点や唐音読みを残す国語史的にも貴重な資料であるが、底本は『蒐書大成』（影印）や『金沢文庫資料全書』第一巻・禪籍篇（翻刻）（神奈川県立金沢文庫一九七四年）等によつて比較的容易に参照できるため、原文は漢字のみとし、文字も通用の新字体に統一した。また、読解の便宜のため、底本に朱筆で打たれた読点を極力尊重しつつ、あらたに標点を施した。

一、本稿では検索の便を考慮して、各則のはじめに金沢文庫本における通し番号、三百則全体の通し番号、および表題を太字で付した。金沢文庫本の通し番号は、底本中に十則ごとに書かれる通し番号を元にし、「」内に漢数字で表記した。但し、脱丁部分にあたる五七則から六七則、および七六則から八一則は欠番扱いにし、八二則は後半部分が存在するので則数に入れた。三百則全体の通し番号は、石井修道校注『道元禪師全集』五（春秋社一九八九年）所載の通し番号を付し、「」内に算用数字で表記した。表題も同書の目次（凡例所載）を採用した。

一、訓読は、底本の句読訓点を忠実に再現するよう努めた。底本には漢字の左右に振り仮名が振られ、一文に訓読みと音読みを併記する例が存在するが、本稿ではまず右側の振り仮名を基準として訓読文を作成し、左のものは（）に入れてその直後に、右傍訓右のものは（右・）、頭注は（頭・）と表記した。また、底本の振り仮名は全て片仮名で濁音表記は一切無く、促音表記等も不統一であるが、読み易さを考慮して訓読には濁点と必要最小限の振り仮名を追加した。但し、底本の振り仮名と混同しないため、本稿で新たに付加したものは平仮名で表記した。また、古用仮名は一律に現行の片仮名に改めた。不読文字は（）に入れて表記した。

一、現代語訳は、訓読文をもとに訳出したものである。近年、漢語史研究の進展により、従来の禅籍の読み方が再検討されてきているが、本稿では、道元が漢語をどのように理解し、それを和語でどう表現したのか、その過程を明かすことを目的としているため、現在の語学的見地から見てたとえ不適切な読み方であつたとしても、敢えて訓読文に忠実な翻訳を試みた。原語の意味と訓読の解釈に相違があると考へた場合は、注にその旨を記した。

一、出典は道元が古則をどう理解し、どう変更を加えたかを明らかにするために付した。但し、出典研究自体は既に行われてゐるため、本稿では細かな考証は行わず、鏡島元隆監修『道元引用語録の研究』（春秋社一九九五年）の成果に従い、第一出典を（A）、第二出典を（B）として表示した。

一、注は本則を読むために必要な情報を載せ、道元禪の思想的展開の上で重要な事項がある場合には、最後に補注を付けた。また、引証に用いた文は、注釈者の解釈を明らかにするため全て書き下しにした。但し、金沢文庫本や祖山本『永平広録』等の古い訓読を残す文を引く場合は、その訓読に従つた。その場合は、書き下し文を片仮名で表記して区別した。尚、注番号は原文中に付した。本稿の目的からすると訓読文中に付すべきであるが、訓読文には多数の振り仮名などが付されているため、いたずらな混乱を避ける処置である。

一、本稿で引用する主な文献は、以下のものを用いた。出典や注においてそれらのものを使用した場合は、書名・巻数・頁数のみを記した。但し、灯史類を使用した場合は、巻数の次に祖師名を明記した。引用が数頁にわたる場合は、その先頭の頁数を表記した。

真字『正法眼藏』（石井修道校注『道元禪師全集』五・春秋社一九八九年）は、則数のみを表記し、頁数等は省略した。

仮字『正法眼藏』（水野弥穂子校注・岩波文庫一九九〇年）は、『正法眼藏』「觀音」巻と表記し、（）内に巻数と頁数を表記した。尚、岩波文庫本に不載の巻は河村孝道校注『道元禪師全集』二（春秋社一九九三年）を用い、（全集二・〇〇頁）と表記した。

『永平広録』（渡部・大谷監修『永平広録考注集成・祖山本』一穂社一九九八年）

『正法眼藏隨聞記』（東隆真編『五写本影印・正法眼藏隨聞記』圭文社一九八〇年／水野弥穂子訳注『正法眼藏隨聞記』筑摩書房一九九二年）  
その他の道元の著作は春秋社の『道元禪師全集』によつた

『大正新修大藏經』は大正〇〇・〇〇〇a、『疋統藏經』は統藏〇〇・〇〇〇dと表記した。

『祖堂集』（基本典籍叢刊・禪文化研究所一九九四年）

『景德伝灯錄』（基本典籍叢刊・禪文化研究所一九九〇年）

『宗門統要集』（柳田聖山・椎名宏雄編・禪学典籍叢刊一・臨川書店一九九九年）

『天聖広灯錄』（柳田編・禪学叢書五・中文出版社一九七五年）

『聯灯会要』（続藏一三六）

『嘉泰普灯錄』（続藏一三七）

『建中靖国統灯錄』（続藏一三六）

『臨濟錄』（入矢義高訳注・岩波文庫一九八九年）

『趙州錄』（秋月龍珉訳注・禪の語録一・筑摩書房一九七二年）

『洞山錄』（柳田編・禪学叢書三『四家語錄・五家語錄』・中文出版社一九八三年）

『曹山錄』（柳田編・禪学叢書三『四家語錄・五家語錄』・中文出版社一九八三年）

『仰山錄』（柳田編・禪学叢書三『四家語錄・五家語錄』・中文出版社一九八三年）

『宏智錄』（石井修道編・禪籍善本古注集成・名著普及会一九八四年）

『明覺錄』（柳田・椎名編・禪学典籍叢刊二・臨川書店一九九九年）

『雪竇頌古』（入矢他訳注・禪の語録一五・筑摩書房一九八一年）

『圓悟錄』（大正四七）

『碧巖錄』（入矢・溝口他訳注・岩波文庫一九九二年）

『一夜本 碧巖錄』（河村孝道・小坂機融編『道元禪師真蹟関係資料集』・大修館書店一九八〇年）

『大慧錄』（大正四七）

『大慧』『正法眼藏』（柳田・椎名編・禪学典籍叢刊四・二〇〇〇年）

『從容錄』（基本典籍叢刊・禪文化研究所一九九四年）

『如淨錄』(大正四八)

『禪門諸祖師偈頌』(柳田・椎名編 禪學典籍叢刊七・臨川書店一九九九年)

『禪門拈頌集』

(柳田・椎名編 禪學典籍叢刊七・臨川書店一九九九年)

一、各則の担当者名は最後に記した。

### 訳注

〔八二〕(182) 百丈野鷗有省

〔前半欠丁〕

……師負痛失声叫：「阿哪阿哪。」<sup>①</sup>祖云：「又道飛過去，元來只在這裏。」<sup>②</sup>師直得浹背汗流。因茲有省。<sup>③</sup>

師次日赴參，衆纏集乃出卷却札拜簾。<sup>④</sup>祖便下座，帰方丈次問師：「我適來上堂，未曾說話，你為甚便卷却簾子？」<sup>⑤</sup>師云：「昨日被和尚把得鼻頭痛。」<sup>⑥</sup>祖云：「你昨日向甚處留心？」<sup>⑦</sup>師云：「今日鼻頭又不痛也。」<sup>⑧</sup>祖云：「你深知今日事。」<sup>⑨</sup>師乃作禮退。

〔書き下し〕

……師負痛(負痛ムデ)失声シテ「阿哪阿哪」ト叫ブ。祖云く、「又夕飛過(去)ト道フニ、元來只這裏ニ在リ。」<sup>ア</sup>師直ニ浹背(カウハイ)  
(背)ニ汗流ルゝコトヲ得タリ。茲ニ因テ省有り。師次ノ日赴參ス、衆纏(ワツ)かニ集ル、乃ち出デゝ札拜簾(チラム)ヲ卷却ス。祖便ち下座シテ、方丈ニ帰ル次ニ師ニ問フ、「我レ適來上堂ス、未ダ曾テ說話セズ、你甚為力便チ簾子ヲ卷却スル。」<sup>ト</sup>師云く、「昨日、和尚ニ鼻頭ヲ把得ラ被テ痛カリキ。」<sup>ト</sup>祖云く、「你昨日甚レノ處ニカ(向)心ヲ留メシ。」<sup>ト</sup>師云く、「今日鼻頭又た痛カラ不(也)。」<sup>ト</sup>祖云く、「你深ク今日ノ事ヲ知ル。」<sup>ト</sup>師乃ち礼を作シテ退ク(退ス)。

〔現代語訳〕

……百丈は、痛みに堪えかねて声をあげた、「あ痛たたつ！」馬祖、「飛んで行つてしまつたなどと言うが、なんだ、ちゃんとここにおるではないか。」百丈はそう言われて、背中にどつと汗が流れた。これによつて、はつと気づくところがあつた。百丈は翌日、馬祖の上堂に赴いたが、大衆が集まるやいなや歩み出て、なんと拝敷を巻き上げてしまつた。馬祖はそのまま法座をおり、丈室に戻りながら百丈に問うた、「ワシがさきほど上堂したとき、まだなにも説かぬうちに、おぬしはどうして拝敷を巻き上げたのか。」百丈、「昨日は、和尚さまに鼻をねじ上げられてそれは痛うございました。」馬祖、「おぬしは昨日、どこに心をおいておつたのか。」百丈、「しかし今日、鼻はもう痛うございません。」馬祖、「おぬしは深く今日の事を会得した。」百丈はそこで礼拝して退いた。

〈出典〉

- (A) 『宗門統要集』卷三（五六頁b）  
 (B) 『聯灯会要』卷四（続藏一三六・二四七頁b）  
 『天聖広灯錄』卷八（四〇八頁b／続藏一三五・三三八頁a）

〔注〕

- ①師＝百丈懷海（七四九～八一四）のこと。一〇二則・一〇八則・一二八則に既出。底本は一七六則より本則前半まで欠丁。『三百則』諸本によれば、欠丁部分の内容は、次のとおり。一八二則、「百丈、因みに馬祖に侍して行く次、忽ち一群の野鴨子の飛び過ぎるを見る。祖云く、是れ什麼ぞ。」師云く、野鴨子。祖云く、甚處へ去くや也。師曰く、飛び過ぎ去る。祖、遂て師の鼻頭を把りて扭る。なお「野鴨子」の話は、『碧巖錄』五三則（中・一〇七頁）に採られてよく知られるが、一夜本では翌日の因縁が要約された形になつてゐる（八六四頁a）。また『祖堂集』卷一五では、本話は百丈惟政の大悟の因縁とされる。本則の変遷ならばに解釈については、入矢義高編『馬祖の語錄』・〔五三〕「百丈の大悟」（禪文化研究所一九八四年、一五三頁）および小川隆「『碧巖錄』雜考（三・四）——『馬大師野鴨子』の話再讀」（『禪文化』一八七・一八八号、二〇〇三年一月・四月）を参照。
- ②負痛＝左傍訓「ム」字、文字がつぶれて判読困難。『金沢文庫資料全書』では「メ」におこす。「ン」の可能性もある。
- ③阿哪阿哪＝「阿哪」は痛苦の叫び声（現代漢語では「哎呀」「哎喲」とも）。「哪」は「耶」「邪」などとも書かれる（『金沢文庫

資料全書』はここを「耶」におこす)。二六二則、「曹山、あるひ日鐘の声を聞いて乃ち云く、‘阿耶阿耶’。僧云く、‘和尚作魔生’。師曰く、‘我が心を打著せり’。』。『伝灯錄』卷一五・徳山宣鑑章、「師因みに疾む……(僧)曰く、‘如何なるか是れ病ま不る者’。師曰く、‘阿邪阿邪’」(二八八頁b)。

(4)祖=馬祖道一(七〇九~七八八)のこと。百丈の師。一〇八則・一五〇則に既出。

(5)元来=「元來」は、なんどもだつたのか。発見や驚き、あるいは期待はずれなどの語気を表す。その上の「将謂(うかと思ひきや)」と呼応する場合が多い(現代漢語の「以為」原義に相当する)。一五七則、「師(=疎山)、言下に省有り。乃ち曰く、‘渙山元來笑裏に刀有り’」。一七八則、「臨濟、因みに半夏に黄檗山に上り問訊す。黄檗の看経するを見て乃ち曰く、‘我れ是れ箇の人かと將謂いきや、元來是れ淹黒豆の老和尚なるのみ’」。二例とも真字『正法眼藏』中巻所載の則だが、欠丁のため金沢文庫本での訓読は確かめられない。

(6)直得=「その結果」という状態にまで至つた。五四則、「師(=百丈懷海)後に黄檗に謂いて云く、‘我れ當時、馬祖の一喝を被むりて、直に三日耳聾なることを得たり(直得三日耳聾)’」。二四八則、「師(=石葦慧藏)、西堂(=西堂智藏)の鼻孔を把らえて拽く。西堂、忍痛の声を作して云く、‘大殺人し! 人の鼻孔を拽いて、直に脱け去ることを得たり(直得脱去)’」。

(7)浹背汗流=背なかいつぱいにびつしより汗をかく。慚愧や恐懼など、極限の緊張状態をあらわす。『会要』卷一二・神鼎鴻譚章、「箇の老和尚に見え、他に劈頭に一錐被れて、直に背に浹く汗の流ることを得、覚えず他を礼すること三拝す」(統藏二三六・三一四頁b)。

(8)有省=「有省」は、はつと気づく所があつたという意。一二三則、「僧<sup>コトバ</sup>言ノ下ニ〈於〉省ムルコト有リ」。一一五則、「二僧<sup>コトバ</sup>、<sup>ウチ</sup>院主<sup>あきら</sup>いはく、近前來」。十七僧、近前するあゆみいまだやまとるに、解院主いはく、「不是風動、不是幡動、不是心動」。

かくのごとく為道するに、十七僧ともに有省なり」(二・一六七頁)。

(9)出巻却札拝簾=「簾」は竹製のしきもの、むしろの類。『摩訶僧祇律』卷四〇・簾席法、「仏、舍衛城に住したまいき。爾の時、比丘尼、簾席を敷いて衣を縫いしに、竹箇にて小便道を傷つけて血出でぬ」(大正三三・五四四頁c)。『碧巖錄』は「礼拝簾」を「拝蓆」を作る。「拝蓆(席)」は敷いたままの場合もあるが、一般には法要等にさいして準備し、終了後は片付ける。上堂

においては法座（須弥壇）の手前に敷かれ、説法の前後に、それをはさんで住持人と知事・大衆のあいだの挨拶がかわされる。『禪苑清規』卷一・上堂、「第二通の鼓に四知事は赴参し、次第して行く。法堂の門内の拝席に於いて南に近づいて法座に面して立つ……第三通の鼓に……住持人、座に陞つて禅椅の前に於いて立つ。先ず侍者問訊す。次に首座・大衆、身を転じて、正しく法座を望んで問訊し、然して後に位に帰る」（鏡島元隆ほか校注『訳注禪苑清規』七一頁、曹洞宗宗務序一九八五年）。『正法眼藏』「安居」卷、「十五日の陞座罷（＝上堂終了後）、住持人、法座よりおりて堵のまへにたつ。拝席の北頭をふみて、面南してたつ。知事、近前して両展三拝す……このとき、首座大衆、知事等、みな面北して礼拝するなり。住持人ひとり面南にして、法座の堵前に立せり。住持人の坐具は、拝席のうへに展するなり」（三・四四〇頁）。「看經」卷、「施主入山、請僧看經は、当日の粥時より、堂司（どうす）あらかじめ看經牌を僧堂前および諸寮にかく。粥罷に拝席を聖僧前にしく」（二・二二一頁）。大衆が集まるやいなや、百丈が礼拝簾をまきあげたのは、馬祖の説法は無用ないしこれで終了という無言の宣言。

(10) 祖便下座帰方丈次問師（あるひ）百丈はこのとき馬祖の侍者であった。出典群B『広灯録』は本則の冒頭に「師、馬祖の侍者と為る。一日、馬祖に随侍して路を行く次、野鶴の声を聞く……」と記す。馬祖は方丈へ帰る途中、侍者としてつきしたがう百丈に次の質問をしたのである。

(11) 昨日被和尚把得鼻頭痛（底本は「昨日、和尚ニ鼻頭ヲ把得ラ被テ痛カリキ」と訓ずるが、「動詞+得」はいわゆる様態補語で、その動作によつて～といふ程度・状態にいたるということ。「和尚に把得ラ被テ鼻頭痛し」と訓むほうが文法構造に近い。五七則、「師（＝道吾円智）方丈の外に在りて岩（＝雲巖晏巖）の薦わざるを聞き、覚えず指頭（かな）を咬得みて血出づ（不覚咬得指頭出血）」。

(12) 今日鼻頭又不痛也（「又」は「～ではあるが、しかしまた……」という転折。句末の「也」は口語の用法、「～になる」「～になつた」（一・八則注①参照）。昨日はひどく痛かつたが、しかし、今日は鼻は痛くなつた。和尚さまに問われた自己を、昨日はともかく、今日はしかとわきまえております、といふこと）。

(13) 今日事（「今日事」は今この瞬間の自己）本分事。二〇二則、「黄櫈示衆して云く、汝等諸人、尽く是れ焜酒糟の漢、与麼に行脚して、何處にか今日の事有らん。還た大唐国裏に禪師無きことを知るや麼」。

道元の著述中に本則全体の引用は見られないが、『正法眼藏』「坐禪箴」卷に、「鳥の飛去」にからめて馬祖の語「只在這裏」を引くのは、本則をふまえたものと思われる。

空闊莫涯兮、鳥飛杳々

「空闊」といふは、天にかかるにあらず。天にかかる空は闊空にあらず。いはんや彼此に普遍なるは闊空にあらず。隱顯に表裏なき、これを闊空といふ。「とり」もしこの空をとぶは飛空の一法なり。飛空の行履、はかるべきにあらず。飛空は尽界なり、尽界飛空なるがゆゑに。この飛、いくそばくといふことしらずといへども、ト度のほかの道取を道取するに、「杳々」と道取するなり。直須足下無糸去なり。空の飛去するとき、鳥も飛去するなり。鳥の飛去するに、空も飛去するなり。飛去を參究する道取にいはく、只在這裏なり。これ兀々地の箴なり。いく方程か只在這裏をきほひいふ。(一・二四八頁)

### 〔八三〕 (183) 廬主渓深柄長

雪峰山畔有<sup>①</sup>僧卓庵。多年不剃頭。自作一柄木杓，去溪邊，舀之（右朱・水）喫。時有僧問：「如何是祖師西來意？」庵主云：「溪深杓柄長。」僧歸舉似雪峰。峰云：「也甚奇怪。雖然如是，須是老僧勘過始得。」峰一日同侍者，將剃刀去訪他。纔相見便問：「道得即不剃汝頭。」庵主便將水洗頭。峰便與他剃却。

〈書き下し〉

雪峰山ノ畔リニ、一ノ僧有テ庵ヲ卓ツ。多年剃頭セ<sup>サ</sup>不。自ラ一柄（一柄ノ）木杓（杓ヲ<sup>サウ</sup>作リテ、溪邊ニ去キテ、之（右朱・水）ヲ<sup>タク</sup>舀<sup>タク</sup>デ喫ム。時ニ僧有テ問フ、「如何是レ祖師西來意。」庵主云<sup>ク</sup>、「溪深ケレバ杓ノ柄長シ（溪深杓柄長）。」僧歸テ雪峰ニ<sup>シテ</sup>舉似ス。峰云<sup>ク</sup>、「也甚ハダ（也甚）<sup>ヤシム</sup>奇怪ナリ。然モ是ノ如くナリト雖モ、須ラク是レ老僧勘過シテ（右<sup>カレ</sup>勘過ス）始テ得ベシ。」峰一日、侍者同剃刀ヲ將テ去リテ他ヲ訪フ。纔ニ相見スルニ便チ問フ、「道得ナラバ即ち汝ガ頭ヲ剃ラ不。」庵主便チ水ヲ<sup>モ</sup>將テ頭ヲ洗フ。峰便チ他ガ与ニ剃却ス。

〈現代語訳〉

雪峰山の麓に、一人の僧が庵を建てた。長年、髪を剃らなかつた。自分で一本の木杓を作り、溪の辺りに行き、水を汲んで飲んでいた。ある僧が問うた。「祖師西來意とは何ぞや。」庵主、「溪が深ければ杓の柄も長くなければならぬ。」僧はもどると雪

峰にそのことを話した。雪峰、「これはまたなんと素晴らしいこと。しかし、そうではあるが、やはりワシ自身が確かめねばなるまい。」かくて雪峰はある日、侍者と共に、剃刀をもつて彼を訪ねた。相見するなり問う。「言い得たならば、お前の頭は剃らぬ。」すると、庵主はただちに水で頭を洗つた。雪峰はそこで彼の髪を剃り落としてやつた。

〈出典〉

(A) 大慧『正法眼藏』卷上 (七頁b)

(B) 『宗門統要集』卷八 (一八一頁a)

「聯灯会要」卷二一 (統藏一三六・三九三頁d)

「圓悟錄」卷一七・拈古 (大正四七・七九四頁c)

『禪門拈頌集』卷一〇 (三三八頁b)

〈注〉

①雪峰山＝福建省候官県にある山。雪峰義存開創の崇聖寺がある。雪峰義存（？～九〇一）については、一三七則注①参照。一〇九則などに既出。

②僧卓庵、多年不剃頭＝僧でありながら僧團に属さず、ある自負心を持つて、孤高の境涯を自受用三昧している。『圓悟錄』では「雪峰会下に一僧あり、辞し去りて山中に在りて庵を卓つ」と記す。

③去溪辺、舀之喫＝渓谷の水を飲む（谷飲）とは、人里を離れ山中に隠棲すること。『淮南子』人間訓、「單豹世に倍き俗を離れ、巖居谷飲し、絲麻を衣ず、五穀を食せず」（劉文典『淮南鴻烈集解』六二一頁、中華書局新編諸子集成、一九九七年）。『宋高僧伝』卷八・龍興寺慧朗伝、「林棲谷飲して、凡て數載を経、乃ち故邑の慧安寺に却帰る」（大正五〇・七五九頁a）。底本「之」の右に朱筆で「水」字あり。なお『金沢文庫資料全書』は「舀」を「滔」におこす。

④如何是祖師西來意＝一九則注②参照。ここは庵主自身の境涯を試る問い。

⑤溪深杓柄長＝渓が深ければ、それに応じて柄も長くなければならぬ。そなたのような浅慮ではこの深き胸中はうかがい得ぬという拒絕。手製の木杓に言よせて自己の境界を暗示した表現で、底本「庵主云」を、『圓悟錄』は「主豎起杓子云」に、「会要」では「僧（＝住庵僧）提起杓子云」に作る。

(6) 也甚奇怪、雖然如是、須是老僧勘過始得。なんと奇特なるものだ。そうではあるが、やはりワシ自身が調べあげねばなるまい。「雖然如是」についての一四則注(6)参照。「雖然」と「も」と訓みならわす。一二四則、「然カモ此くの如くナリト雖ドモ」。『現成公案』卷、「しかもかくのごとなりといへども、花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり」(一・五三頁)。「勘過」は点検すること。一五六則、「砂(=玄沙)曰く、此レハ是レ意識ノ著述ナリ。更ニ須ク勘過始得すべシ。」。

(7) 道得即不剃汝頭。言ひ留められぬなら、おとなしく頭を丸めて我が弟子となれ。

(8) 廬主便將水洗頭。道得を試ることなく、ただちにその言に伏した。廬主の方でも、商量を要せず、一日で師の力量を感得した。孤高の境地に自足していたのではなく、実は然るべき師との出逢いをひそかに待ち望んでいたのである。

### 〔補注〕

本則は『正法眼藏』「道得」卷と『永平廣錄』卷九・頌古七一に全文引用される。また「行持」上には「洗頭到雪峰前」の語が、「三十七品菩提分法」卷には「溪深杓柄長」の語が見える。

### 〔正法眼藏〕「道得」卷

雪峰の真覚大師の会に一僧ありて、やまのほとりにゆきて、草をむすびて庵を卓す。としつもりぬれど、かみをそらざりけり。庵裡の活計たれかしらん、山中の消息悄然なり。みづから一柄の木杓をつくりて、溪のほとりにゆきて水をくみてのむ。まことにこれ飲渓のたぐひなるべし。

かくて日往月来するほどに、家風ひそかに漏泄せりけるによりて、あるとき僧きたりて廬主にとぶ、「いかにあらんかこれ祖師西來意」。庵主云、「溪深杓柄長」。

とふ僧おくことあらず、礼拝せず、請益せず。やまにのぼりて雪峰に拳似す。

雪峰ちなみに拳をきいていはく、「也甚奇怪、雖然如是、老僧自去勘過始得」。

雪峰のいふこころは、「よさはすなはちあやしきまでによし、しかあれども、老僧みづからゆきてかんがへみるべし」となり。かくてあるに、ある日、雪峰たちまちに侍者に剃刀をもたせて卒しゆく。直に庵にいたりぬ。わづかに廬主を見るに、すなはちとぶ、「道得ならばなんぢが頭をそらじ」。

この問、こゝろうべし。「道得不剃汝頭」とは、「不剃頭は道得なり」ときこゆ。いかん。この道得もし道得ならんには、畢竟じて不剃ならん。この道得、きくちからありてきくべし。きくべきちからあるもののために開演すべし。

ときに庵主、かしらをあらひて雪峰のまへにきたれり。これも道得にてきたれるか、不道得にてきたれるか。雪峰すなはち庵主のかみをそる。

この一段の因縁、まことに優曇の一現のごとし。あひがたきのみにあらず、きゝがたかるべし。七聖十聖の境界にあらず、三賢七賢の観見にあらず。経師論師のやから、神通変化のやから、いかにもはかるべからざるなり。仏出世にあふといふは、かくのごとくの因縁をきくをいふなり。

しばらく雪峰のいふ「道得不剃汝頭」、いかにあるべきぞ。未道得の人これをきて、ちからあらんは驚疑すべし、ちからあらざらんは茫然ならん。仏と問著せず、道といはず、三昧と問著せず、陀羅尼といはず、かくのごとく問著する、間に相似なりといへども、道に相似なり。審細に參学すべきなり。

しかあるに、庵主まことあるによりて、道得に助發せらるゝに茫然ならざるなり。家風かくれず、洗頭してきたる。これ仏自智恵、不得其辺の法度なり。現身なるべし、説法なるべし、度生なるべし、洗頭來なるべし。ときに雪峰もしその人にあらずは、剃刀を放下して呵々大咲せん。しかあれども、雪峰そのちからり、その人なるによりて、すなはち庵主のかみをそる。まことにこれ雪峰と庵主と、唯仏与仏にあらずよりは、かくのごとくならじ。一仏二仏にあらずよりは、かくのごとくならじ。龍と龍とにあらずよりは、かくのごとくならじ。驪珠は驪龍のをしむこゝろ懈倦なしといへども、おのづから解収の人の手にいるなり。

しるべし、雪峰は庵主を勘過す、庵主は雪峰を見る。道得不道得、かみをそられ、かみをそる。しかあればすなはち、道得の良友は、期せざるにとぶらふみちあり。道不得のとも、またざれども知己のところありき。知己の參学あれば、道得の現成あるなり。（一・二八七

頁）

### 『永平広録』卷九・頌古七

「雪峰山ノ畔リニ、一僧有リテ卓庵ス。多年剃頭セ不<sup>ス</sup>。自ラ一柄ノ木杓ヲ作ツテ、溪辺ニ去イテ水ヲ呑ンデ喫ス。時ニ僧有ツテ問フ、「如何是祖師西來意。」庵主曰ク、「溪深<sup>タニツカ</sup>シテハ杓長シ<sup>カガ</sup>。」僧帰ツテ雪峰ニ拳似ス。峰云ク、「也甚<sup>マダハナ</sup>ダ奇怪ナリ。然モ是の如くなりと雖モ、須ク是レ老僧勘過シテ始得ナラン。」峰一日、侍者ト同ジク剃刀ヲ持ツテ去テ他ヲ訪フ。纔ニ相見シテ便チ問フ、「道得セバ即チ汝ガ頭<sup>トヅカ</sup>かしラ

ヲ剃ラ不。庵主便チ水ヲ将テ洗頭ス。峰、便チ他ノ与ニ剃却ス。

人有ツテ西來意ヲ問著ス、木杓柄長クシテ渓転タ深シ、箇中無限ノ意ヲ識らんト欲ハバ、松風一タビ弄ス没絃ノ琴。(下・三四二頁)

### 〔八四〕(184) 雲巖置也置也

鴻山問雲巖：「承長老在藥山弄師子，是否？」巖曰：「是。」山曰：「長弄麼？還有置時也無？」巖曰：「要弄即弄，要置即置。」山曰：「置時師子在什麼處？」巖曰：「置也，置也。」

### 〈書き下し〉

鴻山、雲巖二問フ、「承スラクハ、長老、藥山ニ在リシニ、師子ヲ弄スト、是ナリヤ否ヤ。」巖曰く、「是ナリ。」山曰く、「長弄ス麼、還夕置ク時有リヤ也無。」巖曰く、「弄セント要ヘバ即ハチ弄ス、置かんト要ヘバ即チ置ク。」山曰く、「置ク時、師子、什麼レノ処ニカ在ル。」巖曰く、「置也、置也。」

### 〈現代語訳〉

鴻山が雲巖にたずねた、「聞くところでは、長老は薬山禪師の所で修行していたとき、獅子舞をしておられたそうだが、まことか。」雲巖、「いかにも。」鴻山、「いつもしておられたのか、それを下ろして休む時もあつたか。」雲巖、「やろうと思えばやり、やめようと思えばやめるまで。」鴻山、「しかば、休む時、獅子はどこにあるのか。」雲巖、「ほれ、下ろしたぞ。」

### 〈出典〉

(A) 『景德伝灯錄』卷一四(二八〇頁b)

(B) 『聯灯会要』卷一九(続藏一三六・三七五頁a)

### 〈注〉

①鴻山＝鴻山靈祐(七七一～八三五)。一〇三則注①参照。その他一一〇則などに既出。

②雲巖＝雲巖曇晟(七八二～八四二)。一〇五則注①参照。その他一四八則に既出。

③藥山＝藥山惟儼(七四五～八二八)。一二九則注①参照。その他一五〇則に既出。

④弄師子＝獅子舞を舞うこと。中にいる舞い手を仏性、獅子の舞いをその作用に喻える。『伝灯錄』卷一四・雲巖曇晟章は本

則に先立ち、薬山との次の問答を記す。「薬山乃ち又た問う、汝は解く師子を弄すと聞く、是なりや。」師曰く、「是なり。」曰く、「幾出を弄し得るや。」師曰く、「六出を弄し得。」曰く、「我れも亦た弄し得。」師曰く、「和尚は幾出を弄し得るや。」曰く、「我れは一出を弄し得。」師曰く、「一即六、六即一。」（二二八〇頁b）。この「出」は、芝居や演し物などの上演数を数える量詞で、一出が一心に、六出が六根の作用に喩えられている。『臨濟錄』示衆に説かれる「一精明」と「六和合」がこれにあたる。「道流、心法は形無くして、十方に通貫す。眼に在つては見と曰い、耳に在つては聞と曰い、鼻に在つては香を覗き、口に在つては談論し、手に在つては執捉し、足に在つては運奔す。本と是れ一精明、分れて六和合と為る」（三九〇頁）。ちなみに、獅子舞は比喩として用いられるだけでなく、実際にそれを舞う僧も存在した（補注参照）。

⑤要弄即弄、要置即置＝自在に獅子を取り扱つていた様子。「要」は口語、「～しようと思えば」、「～したければ」。「弄」は自由自在に獅子をあやつること。「置」は獅子を下におろすこと。

⑥置時師子在什麼處＝六根休止の時、一心はどこにあるか、という問い。

⑦置也、置也＝渕山の問題提起を放棄した。その意を敢えて論理的に説けば、黄檗希運『宛陵錄』の次の一文のようになろう。  
「云何が自心を識る。即ち如今言語する者、正に是れ汝が心なり。若し言語せばんば、又た作用せず。心の体は虚空の如くに相似て、相貌有ること無く、亦た方所も無し。亦た一向に是れ無なるにあらず、有にして而も見るべからざるなり……若し縁に応ぜざる時は、其の有無を言うべからず、正に応ずる時も、亦た蹤跡無し」（禪の語錄八・一三四頁）。「自心」が一心・仮性、「言語」が六根・作用に対応している。

### 《補注》

覺範慧洪『林間錄』 卷上

端師子とは、東吳の人。西余山に住す、初めて弄師子の者を見て、遂に悟入す。因みに彩素を以て制して皮の色と為し、或いは升堂し客を見ては則ち之れを披る、雪の朝に遇い披て以て城に入り、小兎追逐し、之れを譁して錢を得て、悉く以て飢寒の者に施す。（続藏一四八・三〇五頁a）

### 宋・曾慥『高齋漫録』

白雲の端長老、厥の初めは、禪理未だ契わず、因に弄獅子の戯を觀て、忽ち袈裟を翻して、身を蒙つて跳躍して獅子の態を作す。叢林は

号して端獅子と為す。(嚴一萍選輯『原刻景印百部叢書集成』五一・一二丁裏、芸文印書館一九六八年)

### (八五) (185) 雲際如來藏裏

魯祖(右・終南山雲際師祖禪師)問南泉：「摩尼珠人不識，如來藏裏親收得。如何是藏？」泉云：「王老師与汝往来者是。」④祖云：「不往来者如何？」泉云：「亦是藏。」祖云：「如何是珠？」泉召云：「師祖。」祖應諾。泉云：「去。汝不會我語。」⑤師從此信入。

〈書き下し〉

魯祖(右・終南山雲際師祖禪師)、南泉二問ふ、「摩尼珠、人識ラ不、如來藏ノ裏ニ親シク収メ得タリ。如何是レ藏。」泉云く、「王老師、汝与、往來スル者是ナリ。」祖云く、「不往來ノ者如何。」泉云く、「亦タはレ藏。」祖云く、「如何是レ珠。」泉召シテ云ク、「師祖。」祖應諾ス。泉云ク、「去レ。汝ヂ我ガ語ヲ会セ不。」師此レ従リ信入ス。

〈現代語訳〉

魯祖(終南山の雲際師祖禪師)が南泉普願に質問した、「(『詮道歌』に) ム摩尼宝珠をば、人は知らぬ、しかしそれは如來藏の中にしかと收められている」とある、その如來藏とはいかなるものでしようか。」南泉、「わしとおまえの間を行き来しているものが、それだ。」師祖、「ならば、行き来しないものははどうですか。」南泉、「それもまた如來藏だ。」師祖、「では、摩尼宝珠とはいかなものなのでしょうか。」南泉は呼ぶ、「師祖！」師祖、「ハイ。」南泉、「ゆけ、おまえはわしの言葉を理解しておらぬ。」師祖はこれによつて悟つた。

〈出典〉

- (A) 『宏智錄』卷二・頌古九二(一一六頁) + 『景德伝灯錄』卷一〇(一五二頁a／禪文化訓注本四・四九頁)  
(B) 『宗門統要集』卷四(八〇頁a)  
『聯灯会要』卷六(統藏二三六・二六八頁b)  
『圓悟錄』卷一八・拈古(大正四七・七九七頁b)

〈注〉

①魯祖＝馬祖の法嗣、魯祖宝雲（生没年未詳のこと。『祖堂集』卷一四・『伝灯錄』卷七・『会要』卷五・『会元』卷三に語を録す。本則は、『祖堂集』卷一六・南泉章では、南泉とある僧との問答とされるが、出典群中『宏智錄』のみがこれを魯祖とし、他は全て雲際師祖との問答とする。魯祖と雲際（嗣南泉）とは本来別人であり、万松行秀は『從容錄』卷六・九三則「魯祖と不會」本則評唱の冒頭で、『宏智錄』の記載を以下のように批判している。「終南山の雲際師祖禪師は法をば南泉に嗣ぐ。天童、誤まりて魯祖と為す。此れに就いて之を弁ぜば、学者、応に知るべし、且も池州魯祖山の宝雲禪師は、法をば馬祖に嗣ぐ、乃ち南泉の兄なり也。況や、師祖と南泉、名を以つて之を呼び、此の公案に因つて悟り去る。南泉の子たること疑い無し也」（大正四八・二八七頁）。『終南山雲際師祖禪師』は、右傍加筆。『三百則』諸本は会通して『終南山雲際師祖禪師（嗣南泉、亦曰魯祖）』を作るも、雲際師祖を魯祖と呼ぶ資料は未検。雲際師祖（生没年未詳）は南泉の法嗣で、『伝灯錄』卷一〇・『会要』卷六・『会元』卷四に本則のみを録し、行実は未詳。

②南泉＝南泉普願（七四八～八三四のこと。一五四則注①参照。

③磨尼珠、人不識、如來藏裏親收得＝永嘉玄覺『証道歌』の句（『伝灯錄』卷三〇・六・三頁b／禪の語錄一六・四〇頁）。

④王老師与汝、往来者是＝「王老師」は南泉の自称。俗姓が王であったことに因む。一二五八則、「師（＝南泉）曰く、王老師に什麼の過有りや。」本則の一句は、わしとお前との間で、現にこうしてやり取りが行われている、そのはたらきがまさしく自己の如來藏中の磨尼珠なのだ、というところ。

⑤不往来者如何＝現になしていいる當為が磨尼珠だとすると、それをなしていない時はどうなるのか。作用が現れていない時、仮性はどうなつているのかという反問。一八四則で鴻山が、獅子（六根の作用）は常に弄するのか、それとも置く時があるのかと問うていたのと同じ趣旨。

⑥亦是藏＝作用が發揮されていなくとも、仮性がなくなるわけではない。一八四則注⑦に引く『宛陵錄』を参照。

⑦如何是珠＝しからばその顯不顯にかかわらぬ仮性そのものとは、いつたい如何なるものか。

⑧泉召云、師祖。祖應諾＝ほれ、呼べば応える活きたはたらき、それは常にこうして十全に具わつておるではないか。呼ばれる前、それが己が身の上に無かつたわけでもなく、応えた後、無くなつたわけでもない。「應諾」については一六九則注⑤⑥および一七四則注⑦参照。一六九則・一七四則では「イラフ」の訓が付されている。

⑨去。汝不会我語。今の汝自身の応諾がまさに汝自身の問い合わせの答えたのだ。なぜ、そのことに自ら気づかぬか。

⑩師従此信入。そこで師祖は悟つた。「信入」は「悟入」に同じ。『会要』はここを「師於此悟入」に作る。『伝灯録』卷二五・帰宗策真章、「淨慧<sup>(ノ)</sup>〔法眼〕の堂に升りて問う、「如何なるか是れ仏。」淨慧曰く、「汝は是れ慧超。」師、此れ従り信入し、其の語、諸方に播まれり」(四八〇頁b)。

### 〔八六〕(186) 禾山禪學絶学

吉州禾山澄源禪師、垂語云々：「習學謂之聞、絕學謂之隣。過此二者謂之真過。」有僧出問：「如何是真過？」師云：「禾山解打鼓。」僧云：「如何是真諦？」師云：「禾山解打鼓。」又問：「即心即仏則不問、如何是非心非仏？」師曰：「禾山解打鼓。」僧云：「如何是向上事？」師曰：「禾山解打鼓。」

〈書き下し〉

吉州禾山澄源禪師、垂語シテ云々、「習學、之ヲ聞ト謂フ。絶學、之ヲ隣ト謂フ。此ノニヲ過ル者、之ヲ真過ト謂フ。」有ル僧（僧有テ）出デゝ問フ、「如何是レ真過。」師云々、「禾山打鼓ヲ解ス。」僧云々、「如何是レ真諦。」師云々、「禾山打鼓を解す。」又タ問フ、「即心即仏ハ則ち問ハ不、如何是レ非心非仏。」師曰く、「禾山打鼓を解す。」僧云々、「如何是れ向上ノ事。」師曰く、「禾山打鼓を解す。」

〈現代語訳〉

吉州禾山澄源禪師が垂語していった、「仏道を知識で学ぶものを「聞」という。それを学び尽くしたものを「隣」という。これらを超越したもの、それを「真過」という。」ある僧が進み出て問うた、「真過とは如何なるものですか。」禾山、「わしは太鼓が上手い。」僧、「真諦とはどういうものですか。」禾山、「わしは太鼓が上手い。」僧がさらに問うた、「即心即仏はさておき、非心非仏とはどういうものですか。」禾山、「わしは太鼓が上手い。」僧、「向上の事とはどういうことですか。」禾山、「わしは太鼓が上手い。」

〈出典〉

(A) 『宗門統要集』卷九 (一九〇頁b)

(B) 大慧『正法眼藏』卷上（一五貞b）

『聯灯会要』卷二五（続藏一三六・四二四貞a）

『雪竇頌古』四四（一二九貞／『碧巖錄』四四則・本則評唱、一夜本も同じ）

『禪門拈頌集』卷二六（四四八貞a）

（注）

①吉州禾山澄源禪師＝禾山無殷（八八四～九六〇）。九峰道慶の法嗣。徐鉉「洪州西山翠巖広化院故澄源禪師碑銘」（『徐公文集』二七）があり、「祖堂集」卷一二、『伝灯錄』卷一七等に語を録し、『禪林僧宝伝』卷五に立伝される。

②垂語＝師家が大衆に教える語を示すこと。示衆、垂示に同じ。『碧巖錄』六則、「雲門垂語して云く、十五日以前は汝に問はず、十五日以後、一句を道い将ち来れ。自ら代わりて云く、  
○是れ好日。」（上・一〇四貞）。『廣灯錄』卷一二・興化存

③習字謂：＝僧肇の撰に仮託される中唐の書『寶藏論』第一「廣照空有品」の句。「夫れ學道に三有り。其の一、之を真と

謂う。其の二、之を隣と謂う。其の三、之を聞と謂う。習字、之を聞と謂い、絶学、之を隣と謂う。此の二を過ぐる者、之を眞と謂う」（大正四五・一四四貞a）。この則について『祖庭事苑』卷二に次のようない釈がある。「説く者曰く、人の它方の事を聞くが如し。但だ信ずるのみにして親しくは觀ざる、即ち聞なり。生死に徇わず、涅槃に依らざれば則ち絶学す、これを隣と謂う。隣は近なり。生死、涅槃の二際の平等なるを了りて、取らず捨てず、前の二つを過ぐる者、名けて無上正眞の道と為す」（続藏一三・二五貞c）。

④禾山解打鼓＝ワシは太鼓が上手いんだ。「解」は可能の助動詞。ができる。動詞に前置して、その技能を習得していることを表す。一三五則注②参照。誰でもが普通にできる動作に用いた場合には「上手い」「得意だ」などの語感がともなう。『碧巖錄』はこの一句を、あらゆる意味と論理を超えた絶待の一句（いわゆる「活句」「無理会話」とする。「所謂る、言無味、語無味なり。這箇の公案を明らかんと欲せば、須是らく向上の人にして方めて能く此の語の、理性に涉らず、亦た議論の処なきことを見るべし。直下に便ち会して、桶底の脱するが如くに相い似たらば、方めて是れ衲僧安穩の廻、始めて祖師西來意に契得わん。所以に雲門道く、  
雪峰の輶毬、禾山の打鼓、國師の水碗、趙州の喫茶、全く是れ向上の拈提なり」と）（中・一三

三頁)。

⑤如何是真諦||第一義とはいがなるものか。

⑥即心即仏則不問、如何是非心非仏||「即心即仏」は問わないが「非心非仏」についてはどうか。馬祖の語に基づくもの。「即心即仏」は心こそが仏であるという意で、「非心非仏」はそれへの反措定。『伝灯錄』卷六・馬祖道一章、「僧問う、和尚、為什麼に即心即仏と説く。」師云く、「小兒の啼くを止めんが為なり。」僧云く、「非心非仏。」僧云く、「此の二種の人を除き来らば如何が指示せん。」師云く、「伊に是れ物ならずと道う。」僧云く、「忽ち其中の人に遇い来る時如何。」師云く、「且た伊をして大道を体會せしむ。」(八九頁a)。

⑦如何是向上事||それをもさらに超えてゆくものとは、如何なるものか。「向上」については一一八則注⑥参照。以上のやりとりについて『碧巖錄』四四則・本則評唱は次のように説く。「又た問う、「如何なるか是れ真諦。」山云く、「解打鼓。」真諦は更に一法を立てず。若是俗諦ならば万物俱に備わる。真俗無二、是れ聖諦第一義」。『会要』では、この後さらに「云く、「万法齊しく興る時如何。」師云く、「解打鼓。」の問答が続く。

### 補注①

本則の直接引用は見られないが、『永平広録』卷八・法語五に「禾山打鼓」の語が見える。

昔シ俱胝ノ一指・禾山ノ打鼓・臨済ノ喝・徳山ノ棒、豈ニ許多ノ〈之〉伎倆ヲ存センヤ。唯ダ是レ一道ノ〈之〉証契而已。眼ヲ〈於〉棒ニ著け、手ヲ〈於〉喝ニ拊ケテ、〈而〉余ヲ取ラ不、〈而〉余ヲ看不。自然ニ風行カバ草偃キ、風ヲ看テ帆ヲ使ウ、豈ニ窮極有ランヤ〈耶〉。若シ新条特地ヲ得バ、自ラ拘滯青(肯)心無カラン。人ノ疆為ニ非ズ、乃チ道ノ云為ナリ〈也〉。(下・二三〇頁)

### 補注②

『碧巖錄』四四則・本則評唱

禾山垂示して云わく、「習学、これを聞と謂い、絶学、これを隣と謂う。此の二つを過ぐる者、是を真過と為す」と。此の一則の語は、『宝藏論』に出でたり。学の無学に至る、之を絶学と謂う。所以に道う、浅く聞いて深く悟る、深く聞いて悟らず、之を絶学と謂うと。一宿覓道く、「吾早年より來た學問を積み、亦た曾て疏を討ね経論を尋ぬ」と。習学既に尽く、之を絶学無為の閑道人と謂う。絶学に至るに及んで、方始めて道と相近し。直得に此の二学を過ぐる、是れを真過と謂う。其の僧也た不妨に明敏にして、便ち此の語を拈げて禾山に

問う。山云く、「解く鼓を打つ」。所謂言無味、語無味なり。這箇の公案を明めんと欲せば、須是らく向上の人にして方めて能く此の語、理性に涉らず、亦た議論の処なきことを見るべし。直下に便ち会して、桶底の脱するが如くに相い似たらば、方めて是れ衲僧安穩の処、始めて祖師西来意に契得わん。所以に雲門道く、「雪峰の輶毬、禾山の打鼓、国師の水碗、趙州の喫茶、尽く是れ向上的拈提なり」と。又た問う、「如何なるか是れ真諦」。山云く、「解く鼓を打つ」。真諦は更に一法を立てず。若是俗諦ならば、万物俱に備る。真俗無二、是れ聖諦第一義。又た問う、「即心即仏は即ち問わず、如何なるか是れ非心非仏」。山云く、「解く鼓を打つ」。即心即仏は即ち求め易し、若し非心非仏に到らば即ち難くして、人の到る有ること少なり。又た問う、「向上の人來たる時、如何にか接せん」。山云く、「解く鼓を打つ」。向上の人は即ち是れ透脱灑落底の人なり。此の四句の語、諸方以て宗旨と為し、之を禾山四打鼓と謂う。（中・一三二頁）

〔八七〕（187）金峰喫餅一半

撫州金峰徒志禪師（右・円広、又云玄明大師）。一日上堂、喫餅次、乃拈一箇、從上板頭転一匝。大衆見一々合掌。師云：「假饒十分抬起手、也只得一半。」至晚間請益、有僧云：「今日和尚行餌餅、見衆僧合掌。却云：『假饒十分抬起手、也只得一半。』請和尚全道。」師以手作拈起餌餅勢云：「会麼？」僧云：「不會。」師云：「金峰也始道得一半。」

〈書き下し〉

撫州金峰ノ徒志禪師（右・円広、又た玄明大師と云ふ）。一日上堂、餌餅ヲ喫スル次第ニ、乃チ一箇ヲ拈ジテ、上板頭從リ転ズルコト一匝ス。大衆見テ一々ニ合掌ス。師云く、「假饒ヒ十分ニ抬起手ストモ（手ヲ抬起ストモ）（左・抬起リトモ）（也）、只一半ヲ得タリ。」晚間（晩間）二至テ請益スルニ、有ル僧云く、「今日、和尚餌餅ヲ行ズルニ、衆僧ノ合掌スルヲ見テ、却々（右・却ニ）云フ、假饒ヒ十分ニ抬起手すとも（也）、只だ一半ヲ得たり。請すラクハ和尚全道シタマヘ。」師、手ヲ以テ餌餅ヲ拈起スル勢ヲ作シテ云ク、「会スヤ（麼）。」僧云く、「不会。」師云く、「金峰モ也た始メテ一半ヲ道得セリ。」

〈現代語訳〉

撫州金峰山の徒志禪師（円広大師、また玄明大師ともいう）。ある日、食堂に上り、餌餅を食べて、その一つを手に取つて、首座のところから堂内を一回りした。修行僧たちはこれを見て、それぞれ合掌した。徒志、「たゞこの手を十分に上げきつたとしても、せいぜい半分を得るにすぎない。」その晩の請益で、ある修行僧が問うた、「ひる、和尚さまは餌餅を持つ

て一回りされた時、みんなの合掌を見て、『たとえこの手を十分に上げたとしても、せいぜい半分を得るにすぎない』とおっしゃいました。では和尚さま、半分でなく全部をお教え下さい。』従志は手で餌餅をもち上げる仕草をして言つた、「分かったか。」

僧、「分かりません。」従志、「わしもここではじめて一半を言い得たのだ。」

〈出典〉

(A) 『宗門統要集』卷九 (一九一頁a)

(B) 『聯灯会要』卷二五 (続藏一三六・四二四頁d)

〈注〉

①撫州金峰従志禪師=五代の人、福州古田県(今の福建省古田県)の出身。生卒年未詳。曹山本寂の法嗣。始め撫州(今の江西省撫州市)金峰山に住持し、後に金陵の報恩院に住し入滅す。号は玄明、證は円広。『祖堂集』卷一、『伝灯錄』卷二〇などに語を録す。玄明大師はその号として、『伝灯錄』卷二〇・金峰従志章に見える。「円広、又云玄明大師」の傍注は、底本では本文の右に黒筆した上にさらに朱筆でなぞつている。

②上堂=ここでは法堂に上つて説法することではなく、食堂に上つて食事をとること。<sup>じきどう</sup>「<sup>ゆ</sup>上堂に上つて食事をとること」。一〇六則、「石梯和尚、侍者に問いて云く、『什麼處に去くや。』者曰く、『堂に上りて齋に去く。』」。

③餌餅=餅は日本語でいうモチではなく、小麦粉を捏ねて加工した円形の食品。一〇六則注②参照。餌餅は胡餅、すなわち胡麻をついた餅のこと。睦庵『祖庭事苑』卷一「雲門室中錄」、「買餌餅」、餌は當に胡に作るべし。胡、虜の総称なり。胡麻を用いて餅を作る、故に胡餅と曰う。故に『糀名』(糀飲食)に曰く、『胡餅、言うところは胡麻を以て之れに著くるなり。』『前趙錄』(初學記)卷二六引に云く、『石季龍、胡<sup>えびす</sup>というを諱み、改めて麻餅と為す。』胡麻は即ち油麻なり。餌は食に寄するなり、義に非ず。(続藏一二三・八頁c)。なお中国における面食の歴史については、青木正児『華國風味』(岩波文庫一〇〇一年) 参照。

④従上板頭転一匝=「上板頭」は、「上版頭」とも。僧堂における首座の单(板)。『禪林象器箋』座位類・上板下板の条に、「僧堂の上間の板頭、下間の板頭也」と釈す(中文出版社禪学叢書九、一〇七頁a)。また『同』殿堂類の首座板頭の条には次のように記す。「勅修清規の聖節に云く、『維那、僧堂に於いて、住持の前に往きて問訊し、首座の板より起きて、堂を巡ること一

匝す。備用清規の方丈特為茶に云く、侍者、特為に人の前に往きて問訊し、龕の後ろより首座の板頭に転じて、巡りて問訊すること一匝す」（七〇頁）。ここで金峰は、胡餅を一つ手に持ち、首座の處を起點として衆僧のあいだを一巡した。

⑤大衆見一々合掌<sup>ハ</sup>衆僧は師が自分の前に来るごとに、一人一人、順次合掌した。師が胡餅の拈起によって、「仏法」を開示してくれたのだと理解したのである。

⑥仮饒十分拈起手也只得一半<sup>ハ</sup>わしがこの手を十分に上げきつたとしても、ただ一半を言い得るにすぎない。「仮饒<sup>ハ</sup>也……」は讓歩の文型。たといふでも、なお……の意。一五三則注⑦参照。文法的には「也」の上で切れるが、底本は和語にあわせて「也」の下で断句している。「拈起」は上にあげること。もたげる。底本ではこれを「モタリ（持たり。待つてゐるの意）」と訓む。觀智院本『類聚名義抄』には「把」「持」を「モタリ」と訓む例が見られる（天理図書館善本叢書〈和書之部〉三二『類聚名義抄・觀智院本・仏「把」三〇二頁／仏下本二一ウ、「持」三三三頁／仏下本三七オ、八木書店一九七六年）。

⑦請和尚全道<sup>ハ</sup>では、残りの半分を言つて下さい。

⑧師以手作拈起餽餅勢<sup>ハ</sup>「作<sup>ハ</sup>勢」は、の動作をして見せる。一四六則注⑤参照。

⑨金峰也始道得一半<sup>ハ</sup>実はわしも、いまここでようやく一半を言い得たのだ。すなわち食堂<sup>じきどう</sup>の時は、実はなにも示してはいなかつたのだ。意は解し難いが、次の則と通する所があるようである。七四則、「趙州、因みに婆子有りて財を施し、師に大藏經を転ぜんことを請う。師、禪牀を下り達ること一匝して云く、<sup>ハ</sup>藏を転ずること已に畢れり。」人、回りて婆子に拳似す。婆子云く、「比來は、一藏を転ぜんことを請えるに、如何でか和尚、只だ半藏をのみ転ぜる」（この則はもと『伝灯錄』卷二七に、ある老宿の話として録されていたもの）。

### 〔八八〕（188）帰宗堅起拳頭

帰宗寺智常禪師、因李渤刺史問：「三乘十二分教即不問、如何是祖師西來意？」師乃堅起拳云：「会麼？」史云：「不會。」師云：「一飽學措大、拳頭也不識。」史云：「某甲實不會。」師云：「遇人則途中受用、不遇則世諦流布。」

（書き下し）

帰宗寺ノ智常禪師、因ニ李渤<sup>ボツ</sup>刺史問フ、「三乘十二分教ヲバ即チ問は不、如何是レ祖師西來意。」師乃ち拳ヲ堅起シテ云ク、

「会スヤ〈麼〉。」史云く、「不会。」師云く、「飽学ノ措大、拳頭モ也識ラ不。」史云く、「某甲実ニ不会ナリ。」師云く、「遇人ノトキハ（人ニ遇ヘバ）則ち途中ニ受用ス、不遇ナルトキハ則ち世諦流布ス。」

〔現代語訳〕

帰宗智常に、李渤刺史が質問した、「三乘十二分教は問い合わせぬ、どうか禪の第一義をズバリお示し下さい。」智常はそこで拳を立てて言つた、「わかるかな。」李渤、「わかりませぬ。」智常、「博学の読書人が、拳さえも知らぬとは。」李渤、「わたくしには、本当にわからないのです。」智常、「よき人に出逢えば道のりの途上でもそれを授け、出会わぬときはそのまま世俗の教えが広まつてゆく。」

〔出典〕

(A) 『宗門統要集』卷三（五二頁a）

(B) 『聯灯会要』卷四（統藏一三六・一二五〇頁b）

『景德伝灯錄』卷七（一一四頁b／禪文化訓注本三・九四頁）

〔注〕

①帰宗寺智常＝ききゅうじ帰宗寺は廬山（江西省南康府星子県）にあり。もと東晉の咸康六年（三四〇）江州刺史王羲之がインド僧達摩多羅のために自らの邸宅を改め寺としたのを、唐の元和年間（八〇六～八一〇）智常が住して中興した。智常は馬祖の法嗣、帰宗智常（生没年未詳）。『宋高僧伝』卷一七に立伝され、『祖堂集』卷一五・『伝灯錄』卷七・『会要』卷四・『会元』卷三などに語が録される。

②李渤刺史＝李渤（七七三～八三二）。字、濬之。しゆん長慶二年（八二二年）洪州刺史（郁賢皓『唐刺史考全編』卷一五八・二二八四頁、安徽大学出版二〇〇〇年）。「旧唐書」卷一七一、「新唐書」卷二一八に伝あり。『伝灯錄』卷一〇・標目に、智常の法嗣として「洪州高安大愚禪師、江州刺史李渤、已上二人、機縁無く語句録さず」と記される（一四七頁a）。「伝灯錄」や「会要」では、次の問答が本則の直前に録されている（『統要集』は直後）。「伝灯錄」卷七・帰宗智常章、「江州の刺史・李渤、師に問うて曰く、教中に言う所の、須弥に芥子を納むゝは、渤、即ち疑わず。、芥子に須弥を納むゝは妄譖なるに莫是や否。、師曰く、人伝う、使君は万巻の書籍を読むと、還た是なるや否。、李曰く、然り。、師曰く、頂を磨して踵に至り、椰子の大きさの如くな

れば、万巻の書は何處に著ける。」李、首を免るる而已」（一四四頁b／禪文化訓注本三・九三頁）。

③三乗十二分教即不問、如何是祖師西來意」「三乘」は、声聞・緣覺・菩薩それぞれの立場に応じた教えのこと。「十二分教」は、十二部經ともい、仏典を一二種類に分類したもの。「三乘十二分教」であらゆる仏典の意。『正法眼藏』「仏教」卷に詳説あり（二・三〇一頁）。本則の李渤の問い合わせは、『伝灯錄』では「大藏の教は箇の什麼辺の事を明かし得たる」、「会要」では「一大藏教は甚麼辺の事を明かすや」に作っているが、ここでは經典の所説とは別の「西來意」、いわば教外別伝の意を問うといふ質問となつてゐる。四五則、「玄沙、因みに僧問う、」三乘十二分教は即ち要せず、如何なるか是れ祖師西來意。」師曰く、「三乘十二分教は總く要せず。」『正法眼藏』「仏教」卷は、玄沙のこの問答を引いて、次のように記す。「いはゆる僧問の、三乘十二分教即不問、如何是祖師西來意」といふ、よのつねにおもふがごとく、三乘十二分教は条々の岐路なり。そのほか祖師西來意あるべしと問するなり。三乘十二分教これ祖師西來意なりと認するにあらず」（二・三〇〇頁）。

④師乃堅起拳云、会麼。拳や払子を立てて見せるることは、言葉をこえた第一義を象徴的に直示する——あるいは、そのように人に思わせる——所作。二八一則、「趙州、一庵主を訪ねて便ち云く、」有りや麼、有りや麼。庵主、拳頭を堅起つ。師云く、「水浅うして是れ船を泊する處にあらず。」便ち去る。又た一庵主を訪ねて亦た云く、「有りや麼、有りや麼。」庵主、拳頭を堅起つ。師云く、「能く縋し能く奪う、能く殺し能く活かす、」礼拝して去る。

⑤不會。拳の堅起を、三乗十二分教をこえた玄妙な祖師西來意の呈示と信じて思い悩んでゐる。

⑥飽学措大、拳頭也不識。」「飽学」は、たらふく學問をしている、腹いつぱい學問を詰めこんでいる。「措大」は、書生、読書人を輕侮してよぶ語。酷大・酢大とも表記され、語源には諸説がある。詳しくは、項楚『寒山詩注』第一二〇首の注一（中華書局一〇〇〇年、三二四頁）参照。「也」は、すらも・さえも。博学自慢の文人が、ゲンコツさえも知らぬとは、ということで、李渤の抱いてゐる「西來意」への幻想に肩すかしをくわせ、ことを平常の次元に還した一句。二五五則、「臨濟、僧の來たるを見て、乃ち払子を堅起つ。僧、礼拝す。師、便ち打つ。」二三九則、「羅漢琛和尚、僧の來たるを見て、乃ち払子を堅起て之に示す。僧、便ち札を作す。師云く、「你、箇の什麼」を見て便ち札を作すや。」僧曰く、「和尚の指示を謝す。」師、便ち打ちて曰く、「我れの払子を堅起つるを見て、便ち和尚の指示を謝す」と道い、我れの毎日地を掃き牀を見て、甚と為てか、和尚の指示を謝す」と道わざる。」。

⑦某甲実不会＝智常の意を解さず、なおも「西來意」を求めようとしている。

⑧遇人則途中受用、不遇則世諦流布＝然るべき者に出逢えば途上でもそれを授けて受用せしめ、出逢わなければ、仏説はそれを欠いたまま、ただの世俗諦として世にひろまつてゆく。經典と祖師意の異同が問題なのではなく、両者に通底するものを自らが悟つてゐるか否か、それこそが問題なのだ。それを悟つていなければ、せっかく仏説を記した經典も、あたら世諦として伝わつてゆく外ない。『碧巖錄』八則垂示、「会すれば則ち途中に受用す、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。会せざれば則ち世諦流布す、羝羊藩に触れ、株を守つて兔を待つ」（上・一三三頁）。「正法眼藏」「仏教」卷、「巴陵因僧問、『祖意教意、是同是別。』師云、『鷄寒上樹、鳴寒入水。』この道取を参考して、仏道の祖宗を相見し、仏道の教法を見聞すべきなり。いま、祖意教意と問取するは、『祖意は祖意とは同是別』と問取するなり。いま、鷄寒上樹、鳴寒入水といふは、同別を道取すといへども、同別を見取するともがらの見聞に一任する同別にあらざるべし。しかあればすなはち、同別の論にあらざるがゆゑに、『同別』と道取しつべきなり。このゆゑに、『同別と問取すべからず』といふがごとし」（二・二九九頁）。

### 〈補注〉

本則全体の引用は見られないが、『正法眼藏』「行持」下（一・三六七頁）や「授記」卷（三・五九頁）に「飽学措大」の語が用いられている。また、「仏經」卷には、「人もし問取するとき、みだりに拳頭をたつ」（三・八三頁）、「廣學措大は要にあらず」（九二頁）など、全体にわたつて本則と類似の語が散見する。

〔八九〕（189）清豁賊は家親  
漳州清豁禪師、因僧問：「家貧遭劫時如何？」師云：「不能尽底去。」僧云：「為什麼不能尽底去？」師云：「賊是家親。」僧云：「既<sup>⑤</sup>是家親，為甚麼翻成家賊？」師云：「內既無念，外不能為。」僧云：「忽然捉敗，功帰何處？」師曰：「賞亦未曾聞。」僧云：「恁麼即勞而無功。」師曰：「功即不無，成而不处。」僧云：「既是成功，為甚麼不處？」師云：「不見道，太平本是將軍致，不使將軍見太平。」

〈書き下し〉

漳州清豁禪師、因ニ僧問フ、「家貧シクシテ劫ニ遭フ時如何。」師云く、「底ヲ尽クスコト能わ不<sup>ズ</sup>〈去〉。」僧云く、「為什麼テカ

不能尽底去ナル。」師云く、「賊是レ家親ナリ。」僧云く、「既ニ是レ家親、為甚麼テカ、翻つテ家賊ト成レル。」師云く、「内既ニ応無ケレバ、外為スコト能はズ。」僧云く、「忽然トシテ捉敗セム、功何ノ処ニカ帰スル。」師曰く、「賞モ亦タ未ダ曾テ聞カズ。」僧云く、「恁麼ナラバ即チ勞シテ〈而〉功無シ（無カラム）。」師曰く、「功ハ即ち無キニ不ラズ、成リテ〈而〉処ら不。」僧云く、「既ニ是レ成功、甚麼ト為テカ不処ナル。」師云く、「道コトヲ見不ヤ、太平ハ本是レ將軍ノ致セドモ、將軍ヲ使テ太平ヲ見セシメ不。」

（現代語訳）

漳州清豁禪師に僧が問うた。「家が貧しいのに略奪にあつた時は、いかがでしようか。」清豁、「奪い尽すことはできぬ。」僧、「なにゆえ奪い尽すことができぬですか。」清豁、「賊が身内であるからだ。」僧、「身内であるなら、なにゆえ家財を奪つ賊になどなつたのでしょうか。」清豁、「内に応ずる者がなければ、外から盗みを働くことはできぬ。」僧、「もし、それを捕えたら、その手柄は誰のものになるのでしょうか。」清豁、「褒美のことなど聞いたこともない。」僧、「それでは骨折り損です。」清豁、「手柄が無い訳ではない、成し遂げてもそこに留まらぬということだ。」僧、「手柄を立てたのであれば、なにゆえ留まらぬのでしょうか。」清豁、「言うではないか、天下太平は将軍がもたらすものだが、将軍を太平の世に居らせることはないと。」

（出典）

- (A) 『宗門統要集』卷一〇（三二九頁a）  
 (B) 『景德伝灯錄』卷二二（四四八頁b）  
 大慧 『正法眼藏』卷中（六六頁a）

『聯灯会要』卷二六（続藏一三六・四三七頁d）

（注）

- ①漳州清豁禪師 保福清豁（？～九七六）のこと。雪峰下の睡龍道溥の法嗣。『伝灯錄』卷二二、『会要』卷二六に語を録す。  
 ②家貧遭劫時如何 貧しうえに盜みに入られた時はどうか。「家貧」は空にして無一物なる境地を自ら誇る語。『龐居士詩』卷下、「真に家貧にして無一物為り、此の語も總べて是れ空裏より出づ」（続藏一三〇・四〇頁b）。  
 ③不能尽底去 尽くしきることはできない。真の無一物になどなれるものではない。「去」は置き字扱い。一〇八則注④参照。

(4) 賊是家親 = それは、その盜賊がお前自身の身内であるからだ。自己を無一物にしたものは何者か、そこを考えてみるがよい。

(5) 既是家親、為甚麼翻成家賊 = 身内であるのに、なぜ却つて家財を盗む賊になどなつたのか。「家賊」は家の奸賊。心中の賊の喻え。大慧宗杲『宗門武庫』六八、「梁山の上堂するに及びて（圓頭）果して出て問て曰く、『家賊防ぎ難き時は如何。』山云く、『識得せば寃と為らす。』曰く、『識得して後は如何。』山云く、『無生國裏に貶向す。』……」（大正四七・九五一頁）

b)。

(6) 内既無心、外不能為 = 内から手引きするものがなければ、外から盜みを働くことはできない。盜みに入られるのは、自らの内に賊の仲間がいるからだ。自己を無一物にした自己というものが、なおそこに残っているのではないか、という意。二七七則、「嚴陽尊者、趙州に問う、『一物不将来の時如何。』州云く、『放下著。』嚴云く、『一物不将来、箇の甚麼をか放下せん。』州云く、『恁麼なれば則ち担取し去れ。』」。これは、「一物不将来（=無一物）」が新たなお荷物になつていてはならないか、ということで、本則の意と通じあう。

(7) 忽然捉敗、功帰何処 = その賊を捕らえたら、その功績は誰に属すのか。自己を無一物とする自己、それを自ら更に無にすればよいではないか。

(8) 賞亦未曾聞 = 褒美のことなど聞いたこともない。無にする者をさらに無にする者があつては、意味がない。

(9) 恈麼即労而無功 = それではまつたくの徒労ではないか。『莊子』天運篇、「今、周を魯に行なわんことを斬<sup>もと</sup>るは、是れ猶お舟を陸に推すがごときなり也。労して功無く、身に必ず殃<sup>わざわい</sup>あり」（郭慶藩『莊子集解』五二三頁、中華書局新編諸子集成、一九六一年）。

(10) 功即不無、成而不処 = 功績が無いわけではない。成し遂げてもそこに留まらないのだ。『老子』下篇・第七七、「是を以て聖人は、為して恃まず、功成りて処<sup>あらわ</sup>らず、其れ賢を見<sup>す</sup>ることを欲せず」（楼宇烈『王弼集校注』一八七頁、中華書局一九八〇年）。「功成不居」「功成不処」などともいう。

(11) 太平本是將軍致、不使將軍見太平 = 天下太平は將軍が実現するものだ。だが、將軍を太平の世に安住させることはしない。『会要』、大慧『眼藏』は「不使」を「不許」に作る。『水滸伝』第九四回、「古より道う、『太平は本とはれ將軍の定むるも、將軍の太平を見るを許さず』と。此の言、極めて妙」（容与堂本『水滸伝』一三六九頁、上海古籍出版社一九八八年）。自己を無にする自

己、それをきれいに忘れ去らねばならぬ。

〈補注〉

本則全体の引用は見られないが、『永平広録』卷九・頌古七四に、清豁の最後の語が引かれる。

洞山、因ニ僧問フ、「時節恁麼熱。甚レノ處ニ向テカ廻避セン。」山云ク、「寒熱不到ノ處ニ向ツテ廻避スベシ。」僧曰ク、「作麼生是寒熱不到ノ處。」山云ク、「寒時寒殺闇梨、熱時熱殺闇梨。」

寒熱來ル時撤手シテ行ク、眉毛落尽シテ新名ヲ殺ス、太平ハ本是レ將軍ノ致ナリ、將軍をシテ太平ヲ見セ使ムルコト莫レ。（下・三四六頁）

〔九〇〕（190）馬祖六耳同謀

僧問馬祖：「如何是祖師西來意？」祖云：「近前來，向你道。」僧近前。祖撲耳便掌云：「六耳不同謀。」

〈書き下し〉

僧、馬祖ニ問ふ、「如何是レ祖師西來意？」祖云ク、「近前來、你ニ向テ道ハム。」僧、近前ス。祖、耳ニ撲テゝ（撲耳ニ）便チ掌シテ云ク、「六耳ニ謀るコトヲ同ゼ不。」

〈現代語訳〉

ある僧が馬祖に質問した、「祖師達磨が中国に来られた意味とは、如何なるものでしょう。」馬祖、「こちらに來い。おまえに話してやろう。」僧はすっと進み出る。そこで馬祖はいきなり平手打ちをくらわせた。「三人で密談をするものではない。」

〈出典〉

- (A) 『圓悟錄』卷一七・拈古（大正四七・七九三頁a）
- (B) 『景德伝灯錄』卷六（九四頁a）
- 『聯燈会要』卷五（統藏二三六・一五七頁c）

〈注〉

①僧＝出典群B『伝灯錄』や『会要』は、この僧を馬祖の法嗣・泐潭法会（生没年未詳）とする。本則は右出典群のほか、『碧巖錄』二六則・頌古評唱（上・三三七頁）にも引かれる。

②馬祖＝馬祖道一（七〇九～七八八）。一〇八則注①参照。その他一五〇則・一八二則に既出。

③如何是祖師西來意＝祖師達磨が中国に伝えたものは何か。禪の第一義を問う常套句。一一九則注②参照。

④近前來、向你道＝近前來と言われて、すつと身体が前に出る。そこに汝自身の「西來意」が明らかに現れている、という意。近前來は「應諾」（六九則注⑤）などと同じく、身心の自然な働きの上に自己本分事が全現していることを示す具体例として、よく採りあげられる動作の一つ。一〇則、「青原和尚、因みに僧問う、『如何是れ祖師西來意。』師曰く、『又た恁麼にし去れり。』僧又た問う、『近日、何の言句か有る、師に一両則を乞う。』師曰く、『近前來。』僧近前す。師曰く、『分明に記取せよ。』詳しく述べ小川『語錄のことば—唐代の禪』九、近前來の条（禪文化研究所二〇〇七年）参照。

⑤擗耳便掌＝底本では「耳ニ擗テ、便チ掌シテ」と訓むが、耳を打つのではなく、頬めがけて平手打ちする意。『碧巖錄』六九則・本則評唱、「劈耳に便ち掌して、他が什麼なる伎倆を作すかを看ん」（中・三三・七頁）。ちなみに漢語では、横面をはることを「打耳光」という。『雨窓集』「花灯轎蓮女成仏記」、「一隻手を放ち了わり、和尚の臉上を看著け、只だ一拍、個の大耳光を打す（放了一隻手、看著和尚臉上、只一拍、打個大耳光）」（清平山堂話本）一九八頁、上海古籍出版社一九五七年。

⑥六耳不異謀＝「六耳」は、三人のこと。三人目が加わったとたん、秘密はどこからか漏れる。「祖師西來意」は第三者とは共有できぬ、当事者のみのものだということ。『率庵語錄』仏祖贊・三教図、「六耳謀りごとを同にせず、相い看るや已に漏泄す。都來て只だ三人のみなるも、亀と証せば却つて鱉と成る」（藏稿一二二・六三頁a）。「近前來」といわれれば、体がすつと前に出る。そこに汝自身の本分事—祖師西來意—が隠れもなく現れている。それは汝と達磨の間の密意であり、他人に問うべきものではない、といふこと。

### 〔補注〕

〔伝灯錄〕卷六や〔会要〕卷五は、本則につづけて次のように記す。

### 〔伝灯錄〕卷六

……祖、打つこと一掴して云く、「六耳謀りごと同にせず、來日來たれ。」師、來日に至りて猶お法堂に入りて云く、「請う、和尚道いたまえ。」祖云く、「且く去れ。老漢が上堂する時を待ち、出で来らば汝が為に證明せん。」師、乃ち悟りて云く、「大衆の證明を謝す。」乃ち法堂を繞ること一匝して便ち去る。（〔会要〕卷五も同旨）

担 当 者

八二一 池上

八八一 池上

八三一 小早川

八四一 林

八五一 池上

八六一 小早川

八七一 林

※

※